＼経済産業省「未来の教室」実証事業やEdTech導入補助金の好事例を配信するニュースレター／

# 未来の教室通信

Standard Vol. 13

GIGAスクール環境を活かして先生と生徒達がEdTechを使って創る、「新しい学び方」のモデルをお届け！

Vol. 13

## 生徒が主体となって校則を変える「みんなのルールメイキング」プロジェクトとは？

実証校紹介

### 「当たり前」を見直し、「コトの本質」を突き詰めていく

校則やルールに関しては、「時代の変化に合わせて変えていかなければいけない」「教職員同士でも話し合いは必要だと思うが、なかなか本音で話す機会がない」と感じている教職員の方は少なくないのではないでしょうか。

2020年度から経済産業省の「未来の教室」実証事業として、認定NPO法人カタリバが開発と全国展開を進める「みんなのルールメイキング」プロジェクトは、生徒が主体となって学校の校則やルールを考え、学校や保護者とともに対話しながら見直していく取り組みです。プロジェクト参画校には、「生徒対先生」の関係性に変化と刺激を与えられるよう、カタリバのスタッフのほか、研究者や企業人、弁護士や経済産業省などの外部協力者がサポートを行います。

このプロジェクトの「原型」になったのは、岩手県立大槌高校がカタリバとともに2019年にスタートさせた校則改定の成功体験でした。「厳しい校則を生徒に守らせることは一方通行の指導だと感じていたが、なかなか変えることができなかった」。岩手県立大槌高等学校（以下、大槌高校）で生徒指導主事を務める熊谷先生は、このチャレンジをする以前の学校でのジレンマをそう振り返ります。

2020年度に「みんなのルールメイキング」プロジェクトを導入した2校、岩手県立大槌高等学校と安田女子中学高等学校の事例をご紹介し、校則やルールを見直す過程で「コトの本質」を突き詰める「抽象的思考」や、実証的な「論理的思考」の経験を積んだ生徒や先生たちの姿をお伝えします。

### Case1　岩手県立大槌高等学校

**―徹底した生活指導が行われていたが、一方通行の指導への疑問も**

今年で創立103年目を迎える大槌高校は、平成の初期頃までは校則に違反する生徒が多かったこともあり、これまで徹底した生活指導が行われてきました。全校生徒を集めて月1回実施する整容指導では、細かい規定に沿って教員が髪型や服装のチェックをしていました。

生徒指導主事の熊谷先生は「大槌高校魅力化プロジェクトが始まったことがきっかけで、教員間で『生徒指導の仕方や校則も見直さなくてはいけないのでは

校則検討委員会による議論の様子

ないか』という声が出てきたことから校則の見直しに踏み切りました」と言います。大槌高校では、「ツーブロック禁止」「男子の夏服のネクタイ着用」「靴下の色や丈に関する規定」「下校時のジャージ着用」の4つの校則の見直しを行い、2021年4月からは改定した校則の適用がスタートしました。

プロジェクト実施時に生徒会顧問を務めていた木村先生は「先生たちの指導によって生徒の身だしなみが良くなったという成功体験があったからこそ、従来の指導が続いていたんだろうなと思います」と厳しい校則の背景について分析します。一方で、「生徒を良くするための指導ではなく、指導のための指導になっているのではないか」という違和感もあり、複雑な感情を持ちながら指導をしていたと言います。

## ―生徒たちは、教員が思っている以上に主体的に考える力を持っている

最初に行ったのは「大槌高校生徒宣言」の作成と、校則検討委員会の設置でした。宣言の内容は「なりたい生徒像」「つくりたい学校像」「守りたいこと」などが盛り込まれています。志田副校長は「生徒がつくった校則検討委員会が教員にとってセーフティーネットとなりました。たとえルールをゆるめたことにより風紀が乱れても、委員会に戻してもう一度話し合えば見直しができます」と言います。さらに、「ルールメイキングによって、学校が明るくなり、生徒と先生の関係が良くなったと感じます。教員としては校則をゆるめ、風紀が乱れてしまう心配があったものの、杞憂（きゆう）に終わりました。今の生徒たちは、先生が考えている以上に理性的で、良い方向に向かったと感じています」とプロジェクトのメリットを語ります。

熊谷先生は「これまでは『いつ面接に行っても大丈夫な服装と髪型をするように』と指導をしてきました。でもある生徒が『自分たちはそんなに馬鹿じゃない。面接に行くときは自分でちゃんと服装と髪型を考えられる』と言ったんです。その通りだと思いました」と、生徒からの言葉について振り返ります。「もっと生徒を信頼し、きちんとできるという前提のもとに指導をしないといけないと気づきました」と言います。実際、認定NPO法人カタリバが実施したアンケートからは、ルールメイキングの前後で、「安心・安全な雰囲気がある」、「立場や役割をこえて協働する機会がある」、「本音を気兼ねなく発言できる雰囲気がある」と、先生と生徒とが対等に議論できる関係となり、また先生同士の関係も職員室で自由な発想・発言ができるようになったことがうかがえます。このように、ルールメイキングには学校を変える可能性も秘めています。

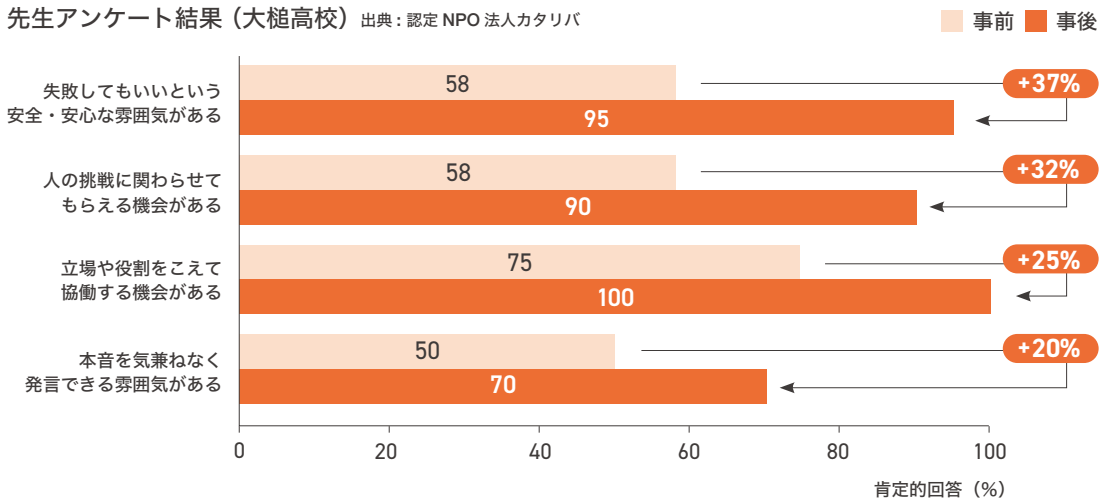
### 大槌高校 生徒宣言 前文

私たち大槌高校生徒は震災後、この大槌高校で避難所運営を始め、復興研究会という組織を立ち上げ、大槌に貢献するよう努力しました。そこでは「自分で考え、自分で判断をすること」、「主体的に活動をすること」の大切さを学びました。私たちはこのような精神を引き継ぎ、学校生活に生かしていきます。

私たちがすべきことは、生徒全員でなりたい生徒像やありたい学校の姿を問い続け、より良い学校生活を送ることができる理想の状態を共有することです。その理想の下で、どのように生活を送るべきかを一人一人が考え判断する力を高めていくことが重要です。私たちが学校生活を送る上で拠って立つべき理想をここに宣言します。

作成した生徒宣言の前文

先生アンケート結果（大槌高校）出典：認定NPO法人カタリバ



### ―プロジェクトに参加した生徒の声

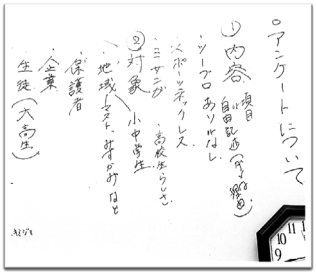
大槌高校では、「ツーブロック禁止」という校則が見直しの対象となりました。まずは、生徒・教員間で校則検討委員会を実施。そこで、教員からツーブロックを許可することへの懸念として、「就職活動をする企業側はツーブロックを理由に面接で落とす可能性がある」、「保護者や地域の方は大槌高校のイメージが良い方がよいと思っている」といったことが指摘されました。そこで、校則検討委員会では、地域企業・役場や保護者などにアンケートを行い、その結果、企業や役場はツーブロックを特に気にしていないこと、保護者も「義務教育ではないからある程度自由でもよい」と考えていることが見えてきました。君島さん（当時高校3年生）は、「校則検討委員会があることで、様々な視点を取り入れ、ルールや考えの変化に対応できる」ことに気付いたと言います。

中学時代は校則違反を続けていたという当時高校1年生の中村さんは、「正直、校則を変えるのは無理だと思っていました」と振り返ります。さらに「『変えたい』と動くことが大事。学校のルールだって変えることができました。きっと、今ルールを破っている人たちも変わりたいと思っています。一緒に変わりたいと考えてくれる人がいることが変わるきっかけになり、委員会の意義がそこにあると思っています」と語ってくれました。当時高校3年生の古川さんは、「自由でいたい」という思いからプロジェクトに参加。「ルールは私たちがより良い社会生活を送るため、未来を守るために存在しなければならないと思いました」と自身の学びを話してくれました。

プロジェクト導入時に発足した校則検討委員会は継続して活動を続けており、現在も校則やルールについて、定期的に話し合いをしています。

大槌高校過去記事はこちら

## 生徒・教師間での校則検討委員会の開催




○職員側の意見
・保護者や地域の方は大槌高校のイメージが良い方がよいと思っているので、反対している
・就職活動をする企業側はツーブロックが理由で面接で落とす可能性がある
↓
印象が悪いということは本当なのか。
⇩
大槌町に生きる子供たちとしての印象
→地域の方々、保護者

就職活動から見た印象
→企業の方々

### ツーブロックのそれぞれの意見

| | 生徒 | 職員 | 保護者 | 企業 |
|---|---|---|---|---|
| | 62/7 | 8/10 | 38/15 | 2/0 |
| 賛成 | ・そこまで派手だと思わないから。<br>・ツーブロの人を見ていても別に悪い印象を持たないから | ・ある程度ならば、いわゆる「奇抜」ではない範囲である。 | ・生え際がすっきりして良いと思う。次のカットまで間隔も開くので経済的。<br>・義務教育でないからある程度自由でも良いと思う。髪型ぐらい自由でいいのでは。 | ・役場庁舎内でもツーブロックには抵抗はない。（町役場）<br>・どちらでもない、しかし、変でもないし、ツーブロックは何も気にならない。（釜石市ホテル） |
| 反対 | ・面接のときにしてはいけない髪は普段からするべきではない | ・清潔・さわやかさよりも明らかにオシャレを意識し、勉学に励む準備ができていない。<br>・就職先の企業が認めていないのであれば、学校でも認めないことにしないと就職に影響が出る。 | | |

## アンケート結果から

様々な立場からの視点を見てみると異なる意見

例）生徒　ツーブロの人を見ていても別に悪い印象を持たないから。
職員　明らかにオシャレを意識し、勉学に励む準備ができていない。
保護者　義務教育でないからある程度自由でも良いと思う。

⇩

**ルールは変化が激しいもので年齢や職業でその人にあるルールが違う**

**いろいろな視点から見てみると個人間で考えに差が出てしまうもの**

大槌高校３年（当時）君島真叶さんの
ルールメイキングシンポジウムでの発表資料

**Vol.13　岩手県立大槌高等学校**

1919（大正8）年に町立大槌女子職業補習学校として創立。現在は大槌町と連携して「高校魅力化プロジェクト」を立ち上げ、三陸地域の復興と未来をリードする高校生を育てる、魅力ある学校づくりに取り組んでいる。

Case 2 へ続く

## Case 2　安田女子中学高等学校

見直したい校則を議論する生徒

### ―ワークショップを通して、それぞれの教員の考え方を共有

広島県広島市にある私立の中高一貫校、安田女子中学高等学校（以下、安田女子中高）では、「スマホの持ち込み」「放課後の立ち寄り」「保護者同伴でないと許可されていない場所への出入り」の3つの校則の見直しを行い、2021年4月からは改定した校則の適用がスタートしました。

安田副校長は「正直なところ、ルールメイキングを始めることには、少し不安がありました。しかしプロジェクトとして、カタリバやプロボノの方々にアドバイスを頂き、全教員が参加したワークショップで考えを深められたことは心強かったです」と導入当初を振り返ります。校則やルールの見直しは、教員でもやったことがない方がほとんどです。最初は弁護士の方から「そもそも校則とは何か？」という内容のレクチャーを受けました。その上で教員同士で「今の校則やルールについてどう感じているか」を話し合い、「大切にしたいルール」「検討の余地のあるルール」「新たに必要なルール」の3つに分類しました。「生徒手帳などに書かれている校則は共通の認識がありますが、生活上のルールやマナーは教員間でも微妙に認識が違いました」と語るのは、生徒会顧問の上所先生。ワークショップを通じてそれぞれの考えを共有し、教員間でも校則やルールの整理ができたと言います。

教員対象ワークショップの様子

### ―誰もが納得し、運用しやすい校則やルールをつくるために

プロジェクトの開始当初は生徒会メンバーが中心となり、全校生徒に対してGoogleフォームを利用してWeb上でアンケートを実施。今の校則についてどう思うかをヒアリングしました。また、コロナ禍の中で入学してきた新入生に対してはオンラインで学校のルールを説明する企画を立て、ルールを知ってもらう機会をつくりました。その後はプロジェクトを進める有志メンバーを集め、2020年6月に中学1年生から高校2年生までの約20名で放課後に週1回の活動を開始。

先生と「校則改定案」について対話する生徒

特徴的なのは、全生徒や教員が興味を持てるような戦略を立てたことです。各学年のフロアに自由に意見を書いてもらえるような模造紙を掲示し、さらにシールを貼ってもらうことで参加型で意見を収集。有志メンバーの発案により、校則やルールの見直しに慎重な意見を持っていそうな先生を会議に招待したり、あえて先生の目につく場所で活動するなどの工夫もしました。その他、保護者へのWebアンケートや県警の少年育成官の方へのヒアリング、生徒指導の先生に現在の校則が存在する理由を聞くなど、メンバーは自分たちだけの思いで進めることがないよう、極力多くの人の意見を聞いた上で校則やルールを見直しました。

### ―外部チームの存在で、生徒への関わり方が変わった

プロジェクト中は、対面での関わりに加えてZoomなどのICTツールを駆使し、弁護士や大学の先生など、専門家で構成される外部チームが生徒と関わりまし

オンライン/オフラインで弁護士と議論する生徒

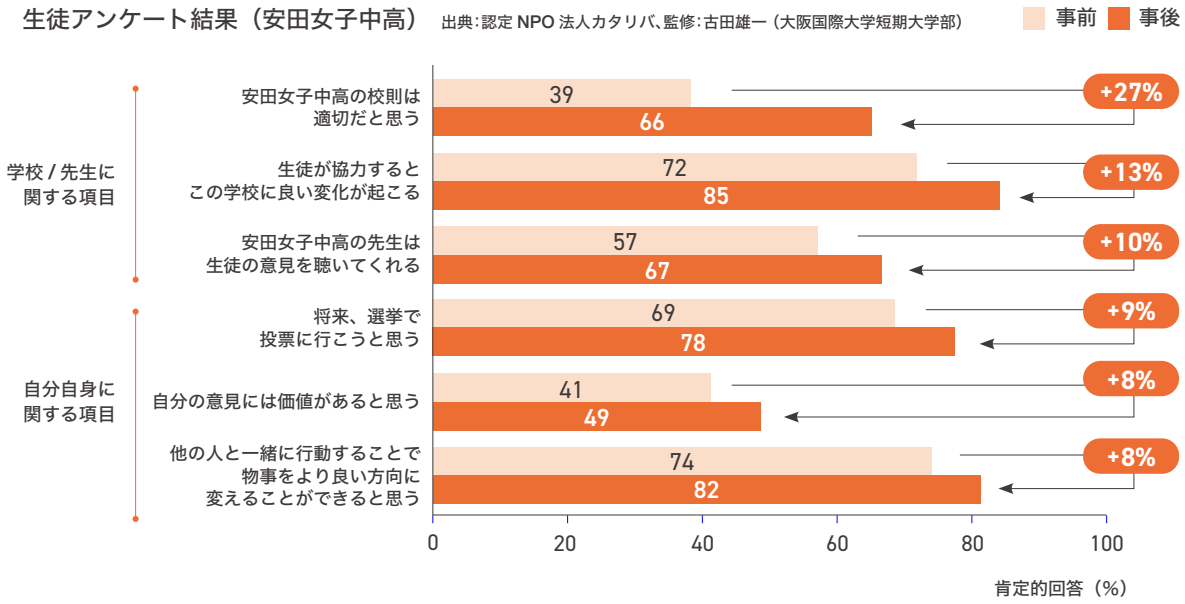
少年育成官の方へヒアリングする様子

た。その様子を見て、上所先生は「外部チームの方は、生徒たちの話を受け止め、『あなたたちが持っている意見は素晴らしい』とずっと言ってくれていました。生徒との関わりの中で、私はつい結論を急いだり根拠を求めたりすることがありましたが、外部チームの方が生徒を優しく温かく見守っている様子を見て、『こういう風に話を聞かないといけないな』と思いました」と自身の学びを語ってくれました。それから、生徒への関わり方が変わったと言います。

## —「らしさ」を見つめ直し、校則やルールが適しているかを話し合う

気をつけた点として、安田副校長は「校則が変わるという表面だけをとらえるのではなく『校則に込められた思いの部分を考えていこう』と生徒に伝えました。そして、人によって受け止め方が異なる『高校生らしさ、安田生らしさ』という言葉を使わないように提案もしました」と言います。教員も、学校らしさや高校生らしさという視点を持ってしまうと、議論が止まってしまいます。「らしさ」を見つめ直し、校則やルールが適しているかを踏み込んで話し合いました。

生徒が主体となって校則の見直しを進めていくことは、当初学校にとって勇気のいることでしたが、いざ始めてみると生徒は「ただ自由であること」以外の視点も持っていたことに驚いたというエピソードも。上所先生は「生徒は教員以上に『安田生のあるべき姿』を考えていて、当初は生徒が提案するルールが、かえって厳しく細かくなってしまったほどでした。そこで対話を重ね、一番いい形にしていきました」と振り返ります。



### ―プロジェクトに参加した生徒の声

実際にプロジェクトメンバーとして校則の見直しを進めた高校３年生（活動開始時は高校２年生）の俵さんは「話し合いを重ねるにつれて、一人一人の意見を尊重しつつも自分の意見に自信を持つことが大切だとわかり、躊躇することなく自分の意見を相手に伝えられるようになりました。最初は異なる意見だと感じても、しっかり話し合ってみると同じ考えによるものだったということも多々ありました」と自分自身が大きく成長するきっかけになったと語ってくれました。法学部を志望している高校３年生（活動開始時は高校２年生）の藤岡さんは「自分の一番身近なルールである『校則』について考えてみたい」と思い、プロジェクトに参加。「初めは生徒が校則を変えることなんて本当に出来るのだろうかと思っていました。しかしこの活動を通して、現在の校則は時代にあっていない、不便だと感じるなどという人がいることが分かりました。そして、さまざまな立場から考え議論することで、過ごしやすい環境を作るために校則を変えることが生徒主体でも実際に実現できました」と言います。

今年度もルールメイキングプロジェクトに参加したい生徒を校内で新たに募集し、現在は第二期の活動がスタートしています。昨年度改定した校則についての振り返りをしながら、引き続き校則やルールについての話し合いをしていきます。

**Vol.13　安田女子中学高等学校（広島県）**

「柔しく剛く」を建学の精神として、1915（大正4）年に創立された伝統ある中高一貫校。文理の枠を超えたコース選択ができるほか、探究活動や国際交流を通じてさまざまな分野で活躍できる女性を育成している。

### ―真の目的は、「校則を変えること」ではなく「対話の文化を育むこと」

ルールメイキングは、決して生徒が自分たちの希望を訴えるだけものではなく、自ら課題を見つけ、他者の意見も取り入れながら最適解を見つけていくものです。校則を変えたという結果だけがフォーカスされがちですが、生徒たちが「自分たちの力でつくりだし、変えることができた」という達成感やそのプロセスにこそ大きな意義があります。このプロジェクトの真の目的は、校則を変えることではありません。重要なのは、これまで当たり前とされてきたことを見直し、対話を通して自分たちでルールを変えていけることを生徒も教員も体感し、その文化をつくっていくことです。

2021年度も「みんなのルールメイキング」プロジェクトは経済産業省の「未来の教室」実証事業に採択されました。その一環として、現在、認定NPO法人カタリバでは実証事業パートナー校を、100校募集しています。登録いただいた学校には、ルールメイキング教材・研修の提供、教員や生徒交流イベントをご案内し、本事業公式サイトに学校名を掲載します。

2020年度実証事業における大槌高校と安田女子中高の交流の様子

記事で紹介した実証事業の詳細はこちら

**事業者名：認定NPO法人カタリバ**
公式サイト：https://www.katariba.or.jp/

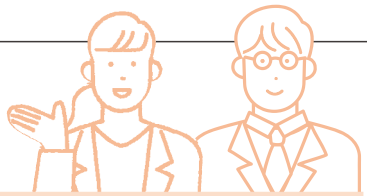
1人1台端末と様々なEdTechを活用した**新しい学び方はこちら**　STEAM Library　EdTech ライブラリー　学校BPR 学校における働き方改革　未来の教室通信

**未来の教室ってなに？**　経済産業省の有識者会議「『未来の教室』とEdTech研究会」では、新しい学習指導要領にもとづき2020年代に実現したい「今を前提にしない学びの姿」を、「未来の教室ビジョン」にまとめました。その議論の内容は、ウェブサイト「『未来の教室』の目指す姿」をご覧ください。

**「未来の教室」通信**
発行：経済産業省 商務・サービスグループサービス政策課 教育産業室　Tel: 03-3580-3922
Facebook: https://www.facebook.com/METI.learninginnovation/
公式サイト：https://www.learning-innovation.go.jp/　未来の教室 検索
記事の定期配信はこちら

# ルールメイキングの進め方（教員向け）

**各校において、ルールメイキングプロジェクトを行う場合のステップをご紹介します**



## STEP 1 ルールメイキングプロジェクトの導入を決める

詳細

責任者（校長・理事長など）にルールメイキングについて共有し、学校として導入を決める。

※学校として独力で実施することも可能だが、ルールメイキング・パートナーへ申し込むと、ルールメイキングの詳しいステップが記された教材などのサポートがある（パートナーへは、学校としての申し込みも、教員個人での申し込みも可能）。またルールメイキングのメルマガに申し込めば、関連情報を得ることができる。

⇒「パートナー校」についての詳細は、https://rulemaking.jp/associate

⇒「メルマガ」についての詳細は、https://forms.gle/QmGhyJTbro9vsoAf7

「パートナー校」詳細サイト→

教員 ＋ ・校長 ・理事長など

▼

## STEP 2 コーディネーター役を決める

詳細

生徒が進めるルールメイキングのプロセスに伴走し、議論の整理を手伝うコーディネーターを決める。

※学校に関わっているキャリア教育団体等が担う方法もあれば、内部教員がその役割を担う方法もある。

教員 ＋ キャリア教育団体

▼

## STEP 3 ルールは変えていいという共通認識を教員間でつくる

詳細

現行のルールや生徒指導に関するアンケートの実施、教員間での対話的なワークショップ実施などを通して、ルールは必要にあわせて変えていいという共通認識を教員間でつくる。

教員同士

▼

## STEP 4 ルール改定のプロセスを作成、生徒と共有する

詳細

生徒のみでルールを決めるのではなく、教員と話し合いをしながらルールの改定をしていくために、そのプロセスを明確化し、共有する。

教員（コーディネーター） ＋ 生徒

▼

## STEP 5 ルールメイキングに取り組む生徒チームをつくる

詳細

生徒会役員が兼務する学校もあれば、有志メンバーを集めて委員会をつくる学校もある。無理に「やらせる」のでなく、自発的に取り組んでくれる生徒と一緒に進めるようにする。

生徒

▼

## STEP 6 生徒の新ルール作成に伴走する（見直すルールの抽出や調査など）

詳細

生徒が主体となってプロセスを進める。教員やコーディネーターは、生徒が議論内容を全校生徒や学校関係者へも共有しながらルールをつくっていけるよう、サポートする。

※生徒がルールメイキングを進めるステップ例として、2020年度「未来の教室」実証事業の成果報告書を参照

生徒 ＋ 教員（コーディネーター）

▼

## STEP 7 新ルール適用後、振り返りを行う

詳細

話し合いや発表の場を設けながら、生徒同士の振り返りをサポートする。あわせて、教員間でも「取り組んでみて、どうだったか」を振り返る機会をつくる。

生徒 ＋ 教員

# 実証校の先生方へのQ&A

岩手県立大槌高等学校・安田女子中学高等学校

## 負担

### Q-1 学校の負担は、どの程度ある？

A

「ルールメイキングプロジェクトによって、校則やルールを守らせることへの労力が減り、**結果的には教員も楽になった。**ただし、そこに至るまでのプロセスにはある程度エネルギーが必要。」

── 大槌高校　志田副校長

A

「生徒も教員も忙しいので、活動時間を確保することが難しかった。試験中になるとなかなか集まることができず、週1回活動するのがやっと。**教員ではない立場の方がコーディネートしてくれたことで、最後までプロジェクトを進めることができた。**」

── 安田女子中高　上所先生

## メリット



### Q-2 プロジェクト導入のメリットは？

A

「前向きなエネルギーで学校をつくっていける点が大きい。『校則を変えないと批判されるから』ではなく、**『みんなで良い学校をつくりたいから』という理由で、生徒たちが中心となって校則と向き合うことができる。**」

── 安田女子中高　安田副校長

A

「生徒が自分自身で考えて行動する機会が多くなる。校則をつくっていく過程の中で、『これはさすがに違うかな』『これはセーフだよね』と生徒も教員も考える。与えられたルールに従うばかりでなく、**生徒が自分で考える学校になっていく**のではないか。」

── 大槌高校　木村先生

## 魅力



### Q-3 校則の見直しは、学校の魅力向上や、生徒募集の増加につながるのか？

A

「校則の再検討は生徒募集と絡めていない。**学校の課題を解決するものとして行っている。**」

── 大槌高校　志田副校長

A

「より過ごしやすい環境を生徒自身で実現していくという点で、学校の魅力向上にもつながる。**いかに生徒一人ひとりが輝く学校をつくるのかと考えた先に、ルールメイキングがある。**」

── 安田女子中高　安田副校長